



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年7月12日 年間第15主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書55章10-11節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章18-23節

福音朗読：マタイによる福音書13章1-23節、あるいは1-9節

今日のテーマ：神のことば

第一朗読では「神のことばの働き」がテーマとなります。『イザヤ書』40—55章は通称「第二イザヤ」と呼ばれています。イスラエルの民がバビロニアに捕囚された頃、捕らわれの地でなされた預言が記されています。神のことばは目には見えませんが、天からの雨のように降ってきます。それは、まるで種のごとく、人のところに蒔かれます。そして、その人を成長させ、再び神の元へと帰っていきます。

第二朗読は、神のことばをところに蒔かれた人が体験する「うめき」がテーマとなるでしょう。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」（ロマ8章14節）とパウロは確信をもって言い切ります。しかし、「神の子」でありながらも、現実の生活の苦しみの中で、希望への「うめき」を発しながら生きていくのが人生なのかもしれません。「うめき」とは、第一朗読との関連で考えてみると、ところに蒔かれた種が芽を出すときの苦しみ、種から「いのち」へと移ろうときの痛みなのではないでしょうか。実際、イエスさまも「うめき」ます（マコ7章32,34節参照）。「うめき」ながら生きる人間への深い共感がイエスさまの中にあるからです。

福音朗読は「種蒔く人」のたとえ話ですが、種蒔く人は、ひたすら蒔き続けます。必ず実があると信じて。種蒔く人はイエスさまです。イエスさまは神のことばを語り続けます。たとえ、敵対する人、受け入れない人、あざ笑う人がいようとも。それはイエスさま自身が神のことばによって生かされているからであり、神のことばには力があると信じているからです。

今週の聖句

耳のある者は聞きなさい(マタ 13 章 9 節)

耳はギリシア語でウースといいます。「身体の器官としての耳」を表します。「(イエスは) 指をその両耳に差し入れて、……『エッフアタ』と言われた。……たちまち耳が開き、……はっきり話すことができるようになった」(マコ 7 章 33—35 節)。このようにしてこの人は、人の声だけでなく、神の声をも聞くようになったのです。さらに、ウースには「聞いただけでなく、それを理解した人」という意味もあります。「目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか」(マコ 8 章 18 節)とお弟子さんたちをイエスさまは叱ります。イエスさまのことばにお弟子さんたちは無理解だったのです。それでも「この言葉を耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている」(ルカ 9 章 44 節)とイエスさまが、ご自分に差し迫った運命をお弟子さんたちだけに告げます。

イエスさまのたとえ話には二つの意味があります。一つは、ある伝えたい内容をより分かりやすい形で説明したものです。その際にはより身近なものを引き合いに出すと、伝えたいことがより分かりやすくなります。第二に、イエスさまが話されたアラム語ではたとえ話のことをマトラーと呼びました。これは「謎」の意味があります。聞き手、あるいは読み手の常識では理解不可能なもので、語り手・話し手であるイエスさまを受け入れない人にとってはたとえ話は永遠に謎のまま残ります。「耳のある者は聞きなさい」(9 節)とは、語り手であるイエスさまを受け入れなさいという呼びかけとなるでしょう。

もしかしたら、イエスさまが実際にお話しになった「種蒔きの話」の本体は 1—9 節までだったのかも知れません。その後の部分は、福音書が成立していく過程で「種蒔きの話」を理解し、解釈した初代教会によってつけ加えられたのかも知れません。もともとのこのたとえ話のテーマは「種蒔く人」がいつも種を蒔き続けるというものだったと思います。それが初代教会の中でイエスさまのたとえ話を解釈した結果、信仰を堅く保つという理解へと変化していったのではないのでしょうか。イエスさまのたとえ話は、それが語られた状況では、半農半漁で生計を立てていくガリラヤの人々にとってはよく分かる、そして共感できる話だったのです。しかし、ガリラヤの豊かな自然という状況から切り離されて、たとえ話だけが語られ始めると本来備わっていた生き生きとした意味は失われていきました。初代教会では神の国の福音を告げるイエスさまの言動に批判や疑問が生じたとき、それに答え、イエスさまのメッセージを説明するためにたとえ話を活用し、教訓のように受け取り、そのことばを生活の規範や指針のように理解していったと思います。こうして今のような福音書が成立したのでしょう。仮に初代教会の加筆があったとしても、わたしたちは今日の福音を神のみことばとして耳にしなければなりません。